

福音とは何でしょうか？GOOD NEWS とは何でしょうか？これは、キリスト教にはじめて触れた方に向けた問いということだけではなくて、長年、クリスチャンとして、教会生活をされている方にとっても、改めて、この問いを考えてみたら、どんな答えが返ってくるでしょうか。

今、使徒パウロが、ローマの信徒に宛てた手紙と一緒に読みはじめていますが、この福音とは何か？GOOD NEWS とは何？ということ、特別大切なこととして語っていると言えます。それは、これからの展開で明らかになることではありますが、その中心は、主イエス・キリストが十字架にお架かりになられたことで実現した、罪の贖いということです。罪のゆるしとすることができます。その罪のゆるしによって、神様と和解した人生を送ることができる。それは神様にあるがままの弱い自分が受けいられているというあたたかいメッセージであります。そのことは、次回、受難週の礼拝で、主イエスの十字架について取り上げるところでさらに明らかになるでしょう。しかし、そのことを、本当に、わたしたちが、わかるようになるために、使徒パウロはまず、罪とは何だろうか？そしてその罪を悔い改めることについて語っている。それが、とてもざっくりした言い方ですが、ローマの信徒への手紙の1章後半から、3章20節というところまでに語られていることでもあります。

その出発点が、今日読んでいただいた、1章の16節以下のところでもあります。

1:17「福音には神の義が啓示されていますが、それは初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」とあります。今日は、「神の義」については、説明しませんが、これが、これから救いをあらわしていこうとする鍵のような言葉です。それは次回にふれたいと思います。それを、パウロは、明らかにしていきたいのですが、そのことに合わせて、こんなことを語り始めるのです。それが、1:19 「不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されました。」この「不信心と不義」と言われていることが人間の罪ということなんです。そして、「現されます。」ということばが、17節の「啓示されている」と同じ言葉が実は使われているのです。つまり、「神の義」と言われている救いの中味と、悔い改めが必要な人間の罪が、表と裏の関係になっているのです。それはどういうことかという、神の義という救いが現わされるためには、その裏返しである、人間の罪が現れてくることが、セットになっているということです。そして、皆さん、この表と裏、罪とゆるしが、セットで明らかになることが、実は、福音、GOOD NEWS なのだということです。これは、なんだか、不思議な組み合わせではないでしょうか。わたしたちとしては、いい事だけを聞きたいと願うのが、当然と言えば当然でありましょう。人間の罪とは何だとか、そこから悔い改めなくてはならないと言われると、どうして自分は悔い改めが必要なんだと反発される方がいます。私は、カルチャーセンターで、ノンクリスチャンの方々と一緒に学んだとことがあります。「聖書っておもしろい」という題で、旧約聖書から新約聖書まで、代表的な人物を取り上げて、紹介をするという講座だったのです。それで、いろいろとわからないことを質問されるのですが、一番多かったのは、罪がわからないという質問でした。特に自分とどういう関係があるのか。自分に罪があつて、悔い改めが必要で、そのために、イエス・キリストが十字架にお架かりになった？頭ではわかるのです。話の筋として迎えることができるのです。しかし、そこから先には、わからない。そうなのです。それが、今日1:18で、人間の罪のことも神様からわたしたちに教えられないと、わたしたちは、わからないのです。そして、それは、人間の

力ではなくて、神様の力、つまり、聖霊の御働きがないと、わからないことになっているのです。しかし、その罪ということが、わかってくると、そして、罪の下で自分は生きられない。自分には救いが必要ということがわかってくると、イエス様の十字架の救いが、本当に身近になってくるのです。そしてそのところで、わたしが悔い改めて、新しく出発し直すことができるということが、どんなにありがたい救いであるか。神様からゆるしの宣言を受けて、全面的に受け入れられて、生きていっていいというメッセージが、何とすばらしい福音があるか。喜ばしい福音、GOOD NEWS であるか。わからされるのであります。

さて、もう少し内容に入っていきます。今日は 1:18~32 にある人間の罪のことが、語られています。細かいところまでは、入っていけないのですが、ここで人間の罪というのは、関係の破れであることが語られています。まず神様とわたしの関係において、逆さまの関係になっていることについて、偶像礼拝という表現で語られていますが、要するに、神様を神様として、敬ったり、礼拝したりせずに、自分が中心になって生きていく傲慢が罪の本質であります。自分中心な傲慢さが神様との関係を壊してしまいます。23 節までです。24 節以下は、この神様との関係の破れが、人と人との関係をも壊していくという展開があります。ここを読むと異性との関係のことがあって、現代では、LGBT、多様性ということが認められていることとそぐわないと思われるかもしれませんが、ここで言われていることは、人と人との関係が壊れるということです。そして、最後に、罪の諸表、リストとして、29 節以下のことがあります。これは結局、隣人との関係を壊すだけでなく、自分自身との関係をも壊してしまうと言えるのではないのでしょうか。自分自身を傷つけるということです。神様との関係を壊し、人と人との関係を壊し、そして、最後は、自分自身との関係をも壊す。つまり、生き難くするのであります。

最後の言葉「このようなことを行う者が死に値いするという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけでなく、他人の同じ行為をも是認しています。」死とあります。これは霊的な死ということで、わたしたちが肉体的に、生きていても、死んでいるというのとは違いますが。つまり、聖書では、わたしたちが表面的には生きていても、霊的には死んだ状態になっているということを罪の結果としての死といいます。この少し前に 22 節「むなしい思いにふけり」ともあります。生きていても、この罪の問題がある限り、つまり神と隣人と自分自身に和解していないと、人は、生きてるのは形だけで、霊的には死んだ状態になっています。生きていても空しいのです。それでこの箇所を良く読んでみると、皆さん、もっと深刻なことが、浮かびあがってくるのですが、それは、神の怒りについてです。神様は、確かにこのような人間のあり方を、怒りとして、否と否定する御心をもっておられるのですが、読んでいて気になるのは、神様がその怒りをどう表しておられるかということ、直接、審判としてあらわしたり、何か懲らしめとして、人間の営みをストップさせるのではなくて、むしろ、放置されているということです。「まかせられる。」ということばが繰り返されています。「無価値な思いに渡され」とあります。それは、落ちるところまで落ちるのをみのがして、ほっておかれるということです。そうすると人間は坂道を転がり落ちるように、霊的な死という谷間に落ちていくのです。放置されるというのは、直接罰せられるよりももっと厳しいことではないのでしょうか。

この放置されるということが神の最終的な御心であったら、わたしたちは、本当に救いようのないことになってしまうのですが、それが最終的な神の怒りのゴールではありませんでした。そのゴールは、イエス・キリストの十字架だったのであります。

本当だったら、腐りきって落ちるとこまで落ちて、滅ぼされてもしかたのなかったところでしたが、神の御子が、この裁きを引き受けてくださって、この罪を贖って下さいました。だから、この十字架に架かったイエス・キリストを信じるのならば、罪が赦されて、神との和解の中を生きる、新しい生が始まります。そして、このゆるしをうけるところで悔い改めに導かれる。十字架のゆるしの中で、わたしたちが、悔い改めて、ゆるしの中に生きること。神と和解し、隣人と和解し、自分自身とも和解して生きていく。そこに、実は、神の怒りの隠されていた覆いを取り除かれていると思います。つまり、神の愛が、本当は、怒りの裏側にはあったのです。愛するからこそ、怒る、ほっておかれる。それは神が忍耐して気づくのを待っておられたということです。十字架はある意味で、神の怒りのゴール。それは審判という意味があります。しかし、その裏側には、なんとかして立ち直らせたいという神の愛の情熱があります。

今日は、怒りこそが愛である証しを一つ。そして、罪が分かっただけで、十字架がわかる証しを加えて終わります。わたしが、初めて、公の場で説教らしきものを語ったのは、実は、仙川教会のボーイスカウトのキャンプでの礼拝でした。神学校に入りたての夏だったのでしょうか。仙川教会のボーイスカウトは、日曜を挟んでキャンプをした場合スカウトウォークという礼拝をします。わたしは神学校に入ったので頼まれまして、担当したまでは良かったのですが、直前まで、まったく話がまとまらなくて、本当に困ってしまいました。神学校に入ったからと言って説教がすぐにできるわけなかったのです。気づくのが遅いです。リーダーが時間が来たからとテントに度々呼びに来られるのだけど、全く説教ができない状態なのです。もう少し待ってもらおう。必死に祈るのです。もう祈ることしかできなくて、祈って祈っていると、またリーダーが呼びに来る。しかたがない。私は聖書箇所だけ示されてその場に立ったのです。その箇所は、イエス様が宮清めをされた場面でした。イエス様が、めずらしく感情をあらわにして、両替場をけちらし、商売人たちの追い散らされた、この怒りは聖なる怒り。人間的にただ感情を爆発させたのではなくて、愛による熱心。それは、人が本来の姿に立ち帰らせようとした悔い改めを迫った愛の熱心。そういう話を示されるままにしたのです。原稿なしです。なんとかその場を乗り切ったということだったのですが、実は、違っていたのです。その頃、団委員長だった池田さんから、後から伺ったことだったのですが、その説教を通して、神様が聖霊の風を吹いてくださったということです。スカウトもリーダーも感動し、息を吹き返したということです。愛の熱情が、そのキャンプに満ち、みんなの顔色が変わり、生き活きと、動きはじめたということです。わたしは、本当に不思議なことと思いました。説教ということはそういうことなんだということを学ばせていただきました。そして知ったのです。罪の指摘と怒りと悔い改めは神の愛の福音の中に含まれていたのです。

もう一つは、わたしが、神学校を卒業して、四国の任地についてからのことです。わたしはご存知の通り、牧師の子どもとして育ちました。キリスト教の空気に満ちたところで、育ったものですから、なにか、救いというものがぼんやりしていたところがありました。特に劇的な回心のような経験ありません。なんとなく、ふんわりしていたのです。神学校を卒業するまで、つまり、自分が仙川教会で青年時代を過ごしていた時は、なんとなく、自分は信仰が分かっているとか、なんとなく、自分はある程度愛があるという感覚でいたようであります。しかし、現実には、そんなものではありませんでした。四国の教会で、人間関係にもみくちやになり、また、結婚して、隣人と共に生きていこうとしたときに、わかってきたのです。自分はなんと愛のない人間なんだということがわかりました。また、信仰もある程度あると思っていたこと

は錯覚で、なんと不信仰な人間なのか。そして、なんと罪深い者であるのか。よくわからされました。そんなことで、悩み、格闘し、もがく中で、改めて、主の十字架のメッセージを聞くのです。いや、自分が説教者なのですが、説教者自身が一番聴くのです。聴いて語るのです。その十字架のメッセージがなんと、慰めに満ちていたか。主の十字架によって、罪ゆるされて新しく生きていってよいということが、どんなに、あたたかい福音であるのか。その福音によって生きていく礼拝ということがどんなに喜びであるのか。ゆるしの中を生きていい。弱さがうけいれられている。ここで重荷を降ろし、リセットされてはじめていい。礼拝はなんと慰め深いものか。わからされました。福音とは、罪が示され、そこからの悔い改めが語られ、そこからの赦しの宣告。新しく生きて行けという新しい人生の応援歌。それを受けることです。ここからはじめて参りましょう。祈ります。